

# 「不滅」の記憶はいかにして可能か

—戦前日本における共同墓の構想—

How Can “Immortal” Memories Be True?  
: The Concept of Collective Graves in Pre-war Japan

阿部 純\*

Jun Abe

## 1. 問題の所在

本論は1930年代初頭に細野雲外によって描かれた、「不滅」を体現する共同墓の構想について考察し、戦前日本の全体主義の政治思想が主に教育機関を通して民衆に教諭される時代において、「不滅」という時間概念がどのような思想背景のもとに形成され、民衆本位の共同墓という記憶メディアの形に落とし込まれていったのかについて言及する。このことを通じて、当時の理念としての「祖先観」を明らかにするとともに、記憶メディアのもつ物語構成力と共同体との関係性を浮き彫りにする。

本論は、墓が人物を記念する記憶装置＝記憶メディアである、との見立てのもと出発している。墓を介した故人とのつながりは、近代以降には共同体の要請のもと、記念碑や神社、そして記念館といった記憶メディアへ展開していくと民俗学の中では整理されている（小松, 2001）。記憶メディアについて昨今問題にあげられることは、戦争の記憶継承の問題であり、こと日本においては、英霊を祀る靖国神社

を社会の中にどう位置づけ、いかに対外的にも通じる言葉で説得していくかという問題がある。どのような形態の記憶メディアを有するかということが、そのままその共同体の歴史観の反映と見なされる。逆に言えば、共同体における集合的記憶は、記憶メディアを通じてなかば強制的に固有名をもった形で、反芻され続けるということでもある<sup>1</sup>。今日の時点から、過去の集合的記憶について議論する際には、このような記憶メディアへの考察が、その使われ方を含め議論される必要がある。

今回ここで取り上げる、細野雲外の「不滅の墳墓」をめぐる一連の書物は、実現されなかった「墳墓」構想であったこと、細野自身の情報が書物以外に見あたらないことなどの理由から、これまで学術的に扱った論考は数えるくらいしかない。民俗学者の土居浩が、当時の無縁墓の増大や墓地荒廃を裏付ける一つの言説として『不滅の墳墓』を取り上げるなど（土居, 2006）、これまで数回しか取り上げられてこ

\*東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：記憶、メディア論、墓、不滅、1930年代、地域

なかった<sup>2</sup>。それでもなお、細野による一連の書物は1930年代の共同体における「不滅」の時間性や、記念するという行為をどのようにとらえ、どのような歴史観を実現させようとしていたのかについて考察する上で有用な書物であると考えられる。

本論では、これまでほとんど分析されてこなかった、細野雲外による「不滅」の時間性をもちうるとされた記憶装置＝メディアが、どのような想像力のもと構想されたものであったのかについて、二つの観点から考察したい。一つは、『不滅の墳墓』が出版された1930年代当

時における家族国家論思想から（2章）、もう一つは、「不滅」を体現する共同墓としての記憶メディアがどのような工学的デザインをもつものとして考えられたのかという点である（3章）。本論は主にテキスト分析の方法によりながら、細野が発表した3冊の著作と、それらを取りまく社会状況について言及し、「不滅」の時間性を体現する記憶メディアと共同体との関係について考察し（3章）、墓から記念碑へと続く記憶メディアの文化史の一助となる視点を提示することを目的とする（4章）。

## 2. 「不滅の墳墓」思想への展開

### 2.1 家族国家論と無縁墓

『不滅の墳墓』が出版された1932年前後は、先に挙げた土居も指摘しているように、都市への人口流動化からなる無縁墓の増加が問題視されていた。1931年に出版された『明治大正史 世相篇』の中で柳田國男は、無縁墓について次のように慨嘆している。

石はむしろ残酷なほどに、人間の記憶を引き留めた。愛にも憎しみにも縁の絶えた家々が、空しく無縁佛の恨みを横たえて居るものが多くなった。自葬の禁止と永久墓地の限定とは、新時代の力を注いだ整理方法であったが、これはただ前のものを粗末にする原因になっただけで、新たに石碑の巨大なるものが乱立する傾向を制するわけには行かなかった。（柳田, 1931 : 272-273）

同様に、『不滅の墳墓』の出版と同じ年に組織された墓参サークル、東京名墓顕彰会の冊子においても、無縁墓に関する記述が見られる<sup>3</sup>。このように、『不滅の墳墓』の出版された時期は、墓地不足や墓地荒廃が社会問題の一つとして行政面からも語られ始めた時期でもあった。墓地の荒廃状況を省み、誰にも参られなくなった無縁墓の増大こそが社会の「思想悪化」状況を表すという点に、細野の「不滅の墳墓」思想は端を発するのである。

無縁墓化が「思想悪化」へとつながる、この思考の根底にはどのような社会背景が横たわっているのだろうか。この問題は、当時「祖先」をどのような存在として捉えようとしていたのかという問題に落としこむことができる。特に政治思想史の中で言及されている、天皇家の神話的先祖である天照大神を「家」の始源的な

祖先としてみなす家族国家論は、「家制国家」とも称され、国家－国民の関係を親－子の関係として捉えることを強いた理念である。「日本の国民全体が、皇室を中心とした一つの家ないし同族結合である」（竹田, 1957）とする理念は、1890年に発布された「教育勅語」において潜在的にはあれ既に明記されていた。「わが国は家族制度を基礎とし国を挙げて一大家族を成すものにして」と家族国家観を直に表した文言が公の場に登場するのは、1910年の第二期国定教科書高等小学校第3学年用修身書である（石田, 1954）。その後、東京帝国大学教授文科大学院井上哲次郎による『国民道徳概論』（1912年の講演記録）や、東京高等師範学校における修身担当教授であった亙理章三郎による『国民道徳序論』（1915年）、東京帝国大学文科大学院倫理学教授の深作安文による『国民道徳要義』（1916年）など、教育の現場から家族国家論をうたう書物が出版されるのである。

社会学者の森岡清美は、日本における祖先観の形成について取り上げる中で、桜井徳太郎による3種の祖先観を取り上げる。桜井は「直接経験的具象的祖先観」、「間接経験的観念的祖先観」、「イデオロギー的抽象的祖先観」の3つを挙げ<sup>4</sup>、最後に関しては、「経験の領域をこえ、実際の血縁的系譜を超越し、イデオロギーとして、形成されてきた観念」による祖先観として定義している。森岡は更にこの「イデオロギー的抽象的祖先観」を、近世以前に現れた名家の系図のような、自家の出自の正統性を

歴史的に積み上げる「擬制的祖先観」と、近代の家族国家観の基礎とされた国家権力として上からの圧力による「イデオロギー的祖先観」とに細分して考えている（森岡, 1984: 108）。この「イデオロギー的祖先観」は、家系や地盤といった正統性を信じるための具体的なつながりがない代わりに、当時の国家権力の中で、すなわち義務教育課程の修身科目から民衆の意識の中に叩き込まれた思想である、と考えられている。

時に、社会情勢は国風を高める「震災記念堂（現在の東京都慰霊堂）」や「靖国神社」などの記念施設が次々と建設された時代でもあった。近代化に伴い失われつつあると思われた文化財を保護する流れも1919年から始まり、国家の「歴史」を記念する記憶メディアのあり方が議論され始めた時期でもあった。皇室を頂点とした官と民とが「家族」という分かちがたい比喩で結ばれ、国家として鼓吹すべき「歴史」が発現し始めた当時の墓地荒廃が、祖先を軽視した見過ごすことのできない都市問題として語られたのである。無縁墓の増加という現実的な状況を見るにつけ、ここで挙げた国民道徳思想が民衆のもとまで届くものであったのかという懸念が、細野雲外の墳墓構想の始まりとなる。だからこそ、細野は膨大なページ数をほこる書物という形式だけではなく、「不滅の墳墓」という名の記憶メディアを町中に置く必要を説いたのだった。

## 2.2 前作『思想悪化の因』と『斯君斯民』で描かれた世相

『不滅の墳墓』の緒言には、「本著は『思想悪化の因「後篇」不滅の墳墓』と命名する筈で

あつたが、書名としては、餘りに冗長であると言ふので、単に『不滅の墳墓』としたのであるが、前著『思想悪化の因』及び『斯君斯民』の姉妹篇である。」（細野, 1932: 1）とあり、ここから『思想悪化の因』から『不滅の墳墓』に至るまでの3冊が、一連の流れをもつものであったことがわかる。前2作が「思想悪化」の実証編とするならば、『不滅の墳墓』がそれら社会の諸問題を解決に導くための計画編、実践編というべき態をなしている。そして「不滅の

墳墓」をめぐるこれら3部作は、細野雲外自身が日本各地から寄せ集めた新聞記事を根拠に、独自の「不滅の墳墓」必要論を展開するという構図をとっている。『思想悪化の因』では、1924年以降の「我國に於ける社會環境の暗黒面の現實相を編纂」した新聞記事が中心となり、『斯君斯民』では、1879年以降の新聞記事における「世界に冠絶する社会環境の光輝燦然たる種々相」（細野, 1931: 1）の記事を集めたものとなっている（図1）。

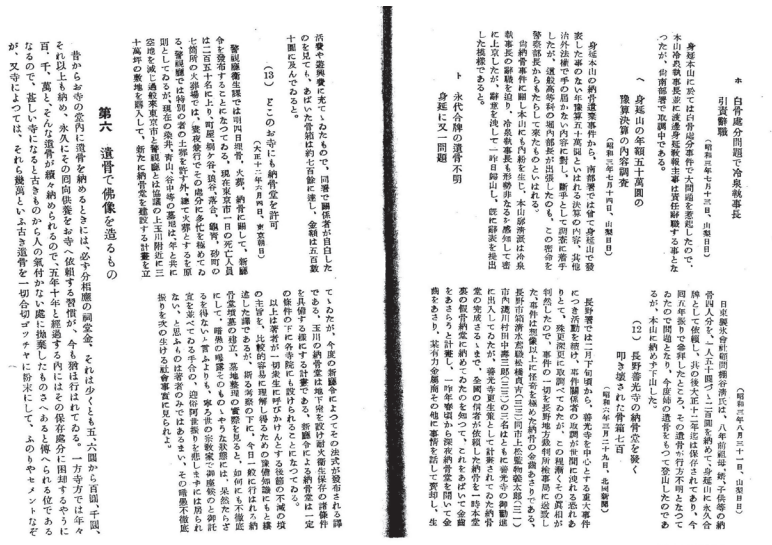


図1 新聞記事が組み込まれた細野の文章 部分  
 (細野雲外 1932 『不滅の墳墓』 pp. 168-169より引用。)

これらの著書を準備した理由として、下記の文言が『思想悪化の因』の「緒言」に掲げられている。

國民思想の悪化しつゝあるのは、悪いと云ふことを重々承知の上、その悪を平氣で敢行する殆んど大多數の國民が、相互に悪化し合つ

てゐるからだ、云ふことに氣付くならば、國民の思想をいかに善導すべきかと云ふことを考へる前に、是非共先づ彼等は如何に悪化し合つてゐるか云ふことを能く理解することが必要ではあるまいか。（細野, 1930: 緒言1）





念物保存活動が行われるようになった時期であり、限られた人々の間の行為とはいえ、著名人の墓参が趣味として行われていた時期でもあった。国家として守り伝えていくべき固有名をもつ事象を、顕彰対象として公的に保存管理する方向に動いていた時期に、細野の思想は一切の固有名を奪う方向に志向するのである。「イデオロギー的祖先観」の追求が、「直接経験的具

象的祖先観」をもちうる墳墓＝記憶メディアの必要性へとつながっていく。「直接経験的具象的祖先観」こそが民衆に一番近い思想であり、それなくして「国家家族観」を民衆まで浸透させることはできないと考え、家族の枠を超える共同体の思想を、共同墓＝民衆からも手の届く「国家」として擬似的に連想させるような形で構想したのである。

### 3. 「不滅の墳墓」の構想・計画

#### 3.1 「不滅の墳墓」の形態と規模

如何に圧倒的権勢によつて建立されても、或は幾百萬の黄金を投じて築設されるとも、個人の爲めに個人に據つて建設され、個人に據つてのみ守護されるものは總て必ず滅亡する。（細野, 1932 : 2）

「不滅の墳墓」は個人や家系の墓ではなく、「地域」を単位とした共同墓として設計されたものである。祖先と自分たちをつなぐものとして墓は機能するが、家系による管理では、墓は荒廢するばかりであるから、より大きな単位での墓をつくる必要がある。国家は皇室を中心とした1つの家族であるから、その下でのわれわれの固有名はなくても構わない、と細野は考え、「イデオロギー的祖先観」を体現するデザインを、「不滅の墳墓」として構想した。その「不滅の墳墓」の外見的特徴としては、下記の4点が挙げられている（細野, 1932 : 354 強調は細野本人によるもの）。

- イ 墳墓自体が共存共榮を象徴すること。
- ロ 明るい<sup>〇</sup>と云ふ印象を與へるものなること。
- ハ 廣潤<sup>〇</sup>と云ふ印象を與へるものなること。
- ニ 清淨<sup>〇</sup>崇邃<sup>〇</sup>の印象を與へるものなること。

このイ～ニに関する細野の見解を要約すると次のようになる。生まれ出た時は別々であったけれども、死んだ後は同じ墓に入り、永遠に子孫から供養を受け続け、共存するのだという「イ」。墓地の暗いイメージを払拭するためにも、平坦な草原に「不滅の墳墓」を置き、夜間に備えて照明設備をも完備するよう示した「ロ」。多くの人々の参集を満たし、祭祀や運動を行うのに適当な運動施設の建設を定めた「ハ」があり、清らかな敬虔の念を表象するものとして「ニ」が加えられている。どれも「象徴する」「と云ふ印象を與へる」と書かれていることから、当時の墓地の様子とは全く異なるイメージを喚起する施設として、「不滅の墳墓」は意識されていた。

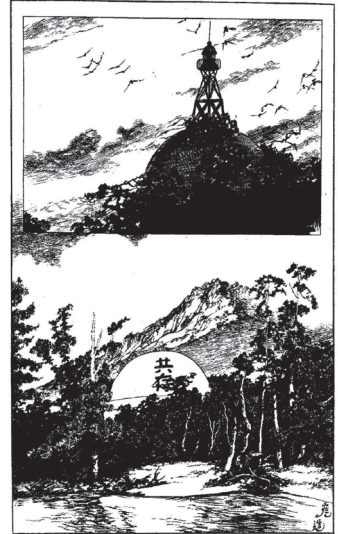
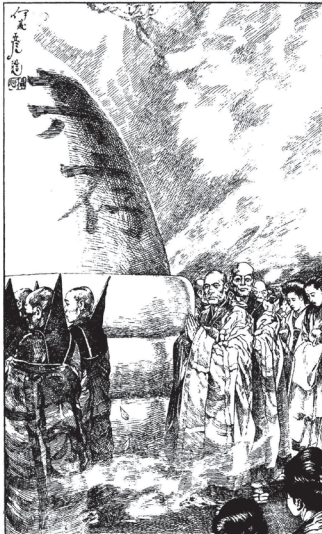
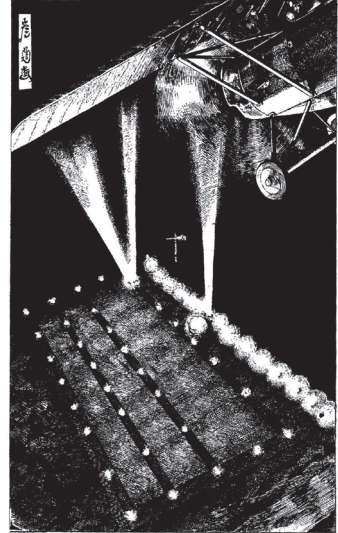


図3 伊藤彦造による「不滅の墳墓」想像図（左上より横にa、b、c、d）  
（細野雲外 1932 『不滅の墳墓』 口絵より引用。）

本書の冒頭には、細野の思想に共鳴した画家の伊藤彦造が描いた「不滅の墳墓」の「理想案」、「想像圖」が掲載されている。「平坦地方に設立さるべき不滅の墳墓」（図3a）、そして「大都市に於ける不滅の墳墓 暗夜着陸直前の飛行機」（図3b）、「不滅の墳墓」に併

置される「宗教會館内預骨堂を廻りて朝夕行はる儀式竝に預骨のため來館せる民衆の感激」画（図3c）と続き、「海湖岸島嶼地方の不滅の墳墓 山岳溪谷地方の不滅の墳墓」外観図（図3d）の4点である。図3aには、大勢の人々が「共存」と書かれた丸いガスタンクのような





### 3.2 文化施設、飛行場を兼ねた「墳墓」

「不滅の墳墓」は、同地域の人と一緒にいる単なる納骨塔として考案されたものではなかった。その広大な土地の中には、一定期間の白骨の預け入れと葬祭、民衆のための教化講演等を行う宗教会館とを置く、と明記されている。都市部においては、毎年行われる宗教儀式のために10万ほどの民衆が一堂に会すことのできる規模の宗教会館、広場の機能をもつものとしても計画されており、「不滅の墳墓」は従来の墓の機能をはるかに越えた、地域の文化施設として構想されているのである。

その文化施設とは如何。曰く、國民保健運動の道場たる施設と、國民精神の淨化陶冶の道場たる施設を兼備せしむる事で、更に中央並に地方都市にありては少くとも一府縣内一箇所だけは、國際航空機の侵入に対する國防的考慮に立脚したる晝夜間航空機離着陸場としての施設を兼備せしむることである。(細野, 1932 : 186)

細野自身が本書の中で参照している「第46回日本帝國統計年鑑」(1927年刊行)によると、1923年の時点で日本全国の墳墓地域の数は約99万箇所及び、1つの県において、平均2万1000もの墳墓地域が存在するという(細野, 1932 : 369)。そこで細野は、地域を平坦地方、山間溪谷地方、海岸湖岸及び島嶼地方とに分けた上で、土地の形状ごとの面積あたりの「不滅の墳墓」を置く基準を設定した。例えば東京を例にとると、当時で約1万3500箇所あった墓地が、「不滅の墳墓」を設置する

基準に従えば約140箇所におさまる算段になるという。東京・大阪では最小のものでも10万坪、地方の部落でも少なくとも5千坪規模の「不滅の墳墓」を用意することで、その「地域」に合った規模の納骨塔や宗教会館を置くことができるとする。

平時は墳墓に據つて國民の保健運動を振興し、國民の精神を淨化陶冶し、一朝有事の日には、地下に眠れる祖先同胞も、地上に生きる同胞子孫も共に、皇國航空軍の武運長久を祈り、敵機を呪詛防遏しなければならぬ、斯くの如くにして墳墓は過去、現在、未來を通じて國民が永劫安住の地であり、死すとも墳墓によつて後世子孫の心を支配し、永久に國民道義の始源<sup>ママ</sup>となり共同努力、共存共榮の本源となり、墳墓と凡ての社会事實との間に間接的に離るべからざる有縁の糸を結び、自ら一切の努力、共存共榮の本源となり、墳墓として凡ての社會事物相互の間に共存不離共榮の法縁を象徴顯現するに至るは明らかである。(細野, 1932 : 186)

先にも触れたように、「不滅の墳墓」の中でも特に墳墓として特異な設備は、軍用機の離着陸場が置かれるという構想だ。各都市レベルの「不滅の墳墓」に飛行場を敷設することで、近い将来に來ると予見されている空中戦の一助になることが想定されている。上記の引用にもあるように、地下に眠る祖先同胞も、地上に生きる子孫同胞も一体となって敵機を倒すこと、そして社会事實と離れない有縁の糸を結ぶための

装置として、この離着陸場の設置をまじめに考えていた。細野の協力者である阿部一郎が、工学者の立場から飛行場の規模を算出し、飛行場に適した照明から地質に関するまで、墳墓の設計とは思われないほど詳細な説明を加えていることも、事の真剣さを語る証拠となるだろう。理想設計案において「不滅の墳墓」は、飛行場としての機能に特化した長方形の敷地が採用さ

れ、照明も夜間の離着陸にもかなう照度のあるものと設定されている。「不滅の墳墓」は祖先を参るという機能にとどまらず、共同体としての「国家」観を実感させるに足るメディア、そして民衆が一堂に会して祭祀を行う場、国家気運を高める場、永久に反芻され続けるものとしてデザインされたのである。

### 3.3 「不滅の墳墓」の区別：国士、郷土、殉職者、民衆

民衆が一堂に会する場の単位として、土地の形状や人口規模に見合った「地域」を割り出すことは、「不滅の墳墓」の構造として必要不可欠なものであった。ここで割り出される「地域」の単位こそが、「直接経験的具象的祖先観」を導くものと細野は考えたからである。

普通人間の常として、直接自己に無関係の事柄は、假令他日自己に参考となるべき事柄であつても、單に他人の事として、雲烟過眼視する。（細野, 1930 : 4）

皇室ほどの影響力をもたない人間の話では、たとえ偉人と言われるような人間であっても世の中への影響力はほとんどないだろうと細野は考えていた。「不滅の墳墓」は、国家、道府県、市町村単位で管理されるものとして、それぞれ「國士の墳墓」「郷土の墳墓」「殉職者の墳墓」「民衆の墳墓」の形で置かれるとされる。それぞれの墳墓に眠る人とは、墳墓の管理団体に見合った偉人となるが、それらが置かれる場所はみな「民衆の墳墓」の敷地内ということになっている。このように、あくまでも先人

たちが人々と物理的に近い場所に置かれること、そしてそこから人々と先人たちとの類縁性が見い出されるようにすることを細野は望んだのである。

「國士の墳墓」「郷土の墳墓」「殉職者の墳墓」と故人を功績で分けた上で顕彰する形を構想しているが、これらの墳墓を通して偉人伝が語り継がれることには重きを置いていなかった。2.2でも触れたように、細野は歴史の重要性こそ認めるが、その歴史をいかに人々の近いところで捉えられるようにするかという点に専らこだわるのである。

五百年も千年も古き過去の、今はミイラに等しき社會環境の事実を引用し、所謂志臣義士の歴史を今更の様に八釜敷繰返して見た所で、夫は甚だ迂遠至極ではないか。（細野, 1930 : 173）

いずれは歴史が「ミイラに等しき社會環境の事実」となってしまう、この思想こそが細野の「不滅の墳墓」思想の根底を流れるものである。民衆と故人との間の親近性こそが、「不

滅」を呼び起こす契機となる<sup>7</sup>。徒歩圏内に民衆それぞれの祖先を祀る記憶メディアがあること、民衆と故人の親近性をもった関係性が「地域」という集合性の地盤の上でつながり続けることこそが、「不滅」の国家を形成する基点となると考えたのである。だからこそ、民衆にとって親近性の薄い、公的に伝わる固有名の歴史にこだわる必要はないと考えていた。皇室の傘下において、その時代の参拝者が既に持ち合わせるそれぞれの祖先への思いが結集可能な記憶メディアとして、「地域」主体の「不滅の墳墓」を構想したのである<sup>8</sup>。

#### 4. おわりに

本論では、細野雲外によって1930年代に発表された3部作、中でも『不滅の墳墓』において描かれる共同墓のありように着目してきた。「不滅の墳墓」構想が、計画段階のものにすぎないという事実をふまえてもなお注目するに値することは、全体主義の時代において、民衆本位の国家思想を、「地域」共同体の形成と共同の墳墓という形式から乗り越えようとした、細野の記憶メディアに対する構想力である。

1930年代のはじめに考案、出版された書物として考えると、2.1で挙げた「国家家族論」の政治思想を無視することはできない。「不滅の墳墓」構想自体が、国家全体が一丸となることをその先の目標に掲げていることは、敷地内に軍用機の飛行場を設置することや、「永遠」思想を持ち続けるという考え方によって裏打ちされていると考えられる。この「国家家族論」思想が民衆に届く形にするため、そして墓地荒

細野は3冊もの大著を通して、「国家家族論」思想を民衆の視点から支える長大な「不滅の墳墓」構想だけではなく、真に祖先を崇拝するための記憶メディアの形式、使われ方、設置場所について考えることに専心した。民衆と祖先との関係のあるべき姿とそれを実現させるための「地域」の規模にこだわった。それはひとえに、「不滅」の記憶メディアを構築する上で不可欠な民衆本位の「思想善導」に即した墳墓という記憶メディアの必要性を、この時代に考えざるを得なかったことを意味している。

廃状況に見られる「思想悪化」への懸念から、細野の「不滅の墳墓」構想は立ち上がったのであった。

記憶メディアはメディアであるからして、それを使う人、本論の場合で言えば墓を参る人の存在は不可欠である。しかも、細野は「不滅」という時間性を記憶メディアを形成する上での重要事項に据えていた。永遠のアーカイブを維持するためには、民衆自身のもつ個人的な物語の構造を継承するもの、つまり公的な「歴史」に還元されない、民衆にとって親近性のある記憶メディアを構想しなくてはならないと考えた。墓には遺骨を入れる場所があり、花や線香を供える場所も決まっており、墓に向かい合ったときになすことも儀礼として決まっている。しかし、その墓に直接的に親近性のもてる人物が絶えてしまったら、記憶メディアとしての役割を果たすことができないと細野は考え、その

ために個人ではなく民衆や「地域」主体の、同じ土地を共有する「不滅の墳墓」を構想したのである。「イデオロギ的祖先観」をもつための初期段階として、「直接経験的抽象的祖先観」を再強化する記憶メディアが当時考案されていたということは、今後の記憶メディアの文化史を考える上でも外すことはできない重要な観点である。

執拗に計算された工学的な観点と、永続する参拝を期待した構想など、「不滅の墳墓」は記憶メディアと地域との関係を見ていく上で非常に興味深い書物であると同時に、今後の記憶メディアの文化史をとらえる上で課題も与えてく

れている。それは、柳田國男が明治期の「地域神」の次なる拡張として挙げていた、土地とのつながりを越えた「靖国神社」をはじめとする国家規模の顕彰空間と、当時の人々との関係、ひいては現代を生きる私たちとの関係をどう捉えていくかという問題である。親和性をもって語ることのできる「物語」とは、土地を離れ人々が境界を移動していく際、どのように見出され構想されるものであるのか。単なる墓ではなく、神社でもなければ、記念館でもない「不滅の墳墓」構想は、今日まで続く私たちの「集合」としての記憶の問題を直視する手掛かりを与えてくれるのである。

## 註

- <sup>1</sup> 江戸後期には人名録の隆盛に伴い墓所録が刊行され、墓がその時代の著名人を証明する記憶メディアとして機能していたと考えられている。掃苔記録を通してまた墓参が行われる中で「歴史」は形作られ、共同体の「歴史」を物語るサイクルが墓をメディアとして行われていたのである（阿部, 2006）。
- <sup>2</sup> 本書についてはこれまで土居の論考を入れて3回ほど、立場の異なる研究者たちによって言及されている。建築史家である橋爪紳也は、「都市墓」計画としての「不滅の墳墓」に注目し、「うさんくさいもの」と評しながらも、時代を読むに興味深い内容であると指摘している（橋爪, 1990: 48-50）。法社会学者、民俗学者としても知られる森謙二は、『不滅の墳墓』が出版された1932年の無縁墓状況について法制度の立場から概観し、本書を無縁墓の同時代的状況を読み込むための資料として扱っている（森, 1993）。
- <sup>3</sup> 土居も指摘しているように、無縁墓、墓の荒廃を嘆く言葉は、墓参を趣味とする当時の「掃苔家」たちの間からも散見される。関東大震災を期に「冥福」という掃苔冊子を発行し始めた池田文痴庵や、『不滅の墳墓』が出版された1932年に結成された、「東京名墓顕彰会」という掃苔家たちのサークルの中でも同様の声があがっていた。「墓碑や関係史蹟が日一日と廢滅して行くのが痛嘆に堪えぬ」（森, 1926）（高橋, 1935）
- <sup>4</sup> 「直接経験的具象的祖先観」とは、生前から故人を知っており、自身の1、2世代上までの直接想像の及ぶ祖先を指し、「間接経験的観念的祖先観」とは直接知っている故人ではないが、家系の系統の中で祖先として認識可能な範囲の祖先を指すとされている（森岡, 1984: 108）。
- <sup>5</sup> 石川県珠洲郡と新潟県糸魚川に実在する2つの墳墓を、細野の「不滅の墳墓」思想と呼応するものとして紹介している（細野, 1932: 466-479）。前者は祠の形式、後者は霊廟の形式をとっており、「不滅の墳墓」のような設備は備えていない。細野は、部落の墓として機能していた2つの墓に、「不滅の墳墓」の実現可能性を見たのである。
- <sup>6</sup> 『不滅の墳墓』緒言の最後には、資料助言をした者として下記の人物の名前が挙がっている。水原堯榮師、阿部一郎、荒木孟、森壽五郎、山崎利雄、波多野薫、米田勉一、岸國次郎。
- <sup>7</sup> たとえば、関東大震災後に伊東忠太によって設計された1930年の「震災記念堂」についても、いずれは犠牲者の関係者もいなくなり、参拝者もいなくなるのであるから永久永遠の供養は当然のこと、その意義すら失ってしまうだろうと懐疑的であった。
- <sup>8</sup> 「地域」主体の記憶メディアについて考えるとき、先にも挙げた柳田國男による「地域神」への言及も考察の鍵となる。柳田は『明治大正史 世相篇』の中で、そもそも忘却装置であったはずの墓が、後に場所を占有し永遠の記念を目指すものとして考



えられるようになったと書き、明治時代になると、旧藩主たちを始祖とする社が日本各地にできたこと、彼らが人神となり、境界をもった地域神として存在していたことについて考察を加えている（柳田, 1931: 277）。『不滅の墳墓』においては、人神思想については触れられていないが、永遠に参拝が続く光景やそれを可能にするメディアの様態について愚直に考えたときに、細野は土地に根づく人々への親近性こそが、人間が真摯な思いを寄せられる範囲であり、継承されるべき記念を形づくる基礎として、「地域」という単位を必要と考えたのであった。

## 参考文献

- 阿部純 2006 「墓と記憶—掃苔文化から見る墓の文化史—」平成18年度 東京大学大学院学際情報学府 修士学位論文。  
アンダーソン, ベネディクト 1997 『増補版想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（白石さや, 白石隆訳）NTT出版。  
アルヴァックス, モーリス 1989 『集合的記憶』（小関藤一郎訳）行路社。  
浅香勝輔 1983 『火葬場』 大明堂。  
土居浩 2006 「<墓地の無緑化>をめぐる構想力—掃苔道・霊園行政・柳田民俗学の場合」, 『比較日本文化研究』, 10 pp.76-88。  
羽賀祥二 1994 『明治維新と宗教』 筑摩書房。  
橋爪紳也 1990 『明治の迷宮都市—東京・大阪の遊楽空間』（イメージ・リーディング叢書）, 平凡社。  
細野雲外 1930 『思想悪化の因』 巖松堂書店。  
——— 1931 『斯君斯民』 巖松堂書店。  
——— 1932 『不滅の墳墓』 巖松堂書店。  
井下清 1937 「都市の墓地整理と将来の対策（一）」, 『掃苔』 6（4）pp.105-112。  
——— 1942 『建墓の研究』 雄山閣。  
井上哲次郎 2003 『国民道徳概論』（シリーズ日本の宗教学2, 『井上哲次郎集』 井上哲次郎 [著], 島蘭進, 磯前順一 [編纂] 第2巻）, クレス出版。  
井上安元 1941 『墓地経営』 古今書院。  
石田雄 1992 『明治政治思想史研究』（復刊）, 未來社。  
伊藤幹治 1982 『家族国家観の人類学』, ミネルヴァ書房。  
小松和彦 2001 『神になった人びと—日本人にとって「靖国の神」とは何か』 光文社知恵の森文庫。  
森潤三郎 1926 「東京市内外に在る名家の墳墓（一）」, 『墓蹟』 1 p.14。  
森謙二 1993 『墓と葬送の社会史』 講談社。  
森岡清美 1984 『家の変貌と先祖の祭』（社会科学叢書）, 日本基督教団出版局。  
高橋源一郎 1935 「探墓家と寺院と墓碑との関係」, 『掃苔』 4（6）pp.179-182。  
竹田聰洲 1957 『祖先崇拜—民俗と歴史』（サーラ叢書; 8）, 平楽寺書店。  
東京市公園課編 1926 『史蹟名勝天然記念物概観』 東京市公園課。  
東京市市役所 1932 『墓地概況』 東京市市役所。  
亘理章三郎 1928 『国民道徳本論—国性論』, 中文館。  
柳田國男 1946 『先祖の話』, 筑摩書房。  
——— 1976 『明治大正史 世相篇』, 講談社 講談社学術文庫。  
矢野敬一 2006 『慰霊・追悼・顕彰の近代』, 日本歴史民俗叢書, 吉川弘文館。



阿部 純 (あべ じゅん)

1982年生まれ

[専攻領域] メディア文化史、メディア論

[所属] 東京大学大学院学際情報学府 博士課程

# How Can “Immortal” Memories Be True? : The Concept of Collective Graves in Pre-war Japan

Jun Abe

## Abstract

This study aims to reconsider a grave as an “immortal” medium from two perspectives. One is *Kokka kazoku ron*, one of the pre-war Japanese political thoughts. Another one is collective memories-based media design. It will do so by analyzing the books written by Ungai (Nagamori) Hosono in the 1930s: *Shiso akka no In* (The Causes of Deteriorating Social Thoughts), *Shi-kun Shi-min* (The Emperor and the Common People) and *Fumetsu no Fumbo* (The Huge Grave of Immortality).

The keyword “immortality” is a word that captures the national psyche during this period. From the point that, people at the time had three views regarding respected ancestors; the first two are the respect for the family members either acquainted or unacquainted. And the last one is the respect for the Emperor (known as *Kokka kazoku ron*) which is ideological view emerging from the ‘KOKUTAI’ political theology. Hence, when the increasing of neglected graves become the social problems, Hosono pointed out the possibility of deterioration of people’s ethics and suggested the solution by redesign of grave.

In *Shiso akka no In* and *Shi-kun Shi-min*, Hosono compiled newspaper articles that highlight the social conditions of the time. In the third book, *Fumetsu no Fumbo*, Hosono argues that new graves were being designed as communal and permanent artifacts. In this book, Hosono expressed the peculiar concept of preserving the history by considering the relationship between eternity and community sharing as key to the solution of it. Though his suggestion has not been implemented, its conclusions have remarkable implications for media studies, especially as one mean of human’s media representation.

The purpose of this thesis is to review Hosono’s idea of the “immortal” grave and explain how Hosono perceives of collective memories of ‘Community’. The result of this research

---

\*The Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

Key Words : Memory, Media Studies, Graves, Immortality, 1930s, Community.

expects to assist the reconsideration of the national memory media in the future.